

岡本韋庵関係資料 (三)

有馬卓也

目次

【はじめに】

【凡例】

【一】年表・「韋庵岡本監輔氏年表」

【二】雑説・「岡本監輔氏」

【三】伝記・岸上質軒「岡本韋庵（樺太最近探索者）」

【四】雑説・佐田白茅「岡本監輔小伝附録荒井直盈」

【五】雑説・佐田白茅「岡本監輔支那遊歴の紀事」

【六】短文・『海国急務』序

【七】短文・『千島探検誌』序（以上（一））

【八】書簡・「林孝恂宛書簡草稿」

【九】短文・『大東合邦論』序

【十】短文・『史記評林補標準』序（以上（二））

【十一】日記・「千島義会発足当時の日記」

【十二】短文・「千嶋義会規則及予算表」

【十三】短文・「千島諸島の現状」

【十一】日記・「千島義会発足当時の日記」

徳島県立図書館・目録番号五二八

（明治二十四～五年）

九月七日。晴霽なり。早旦に広田千秋来訪せり。麻布今井町三十九番地に住せる由を聞けり。尋で速水柳平と云ふものあり。新潟県北蒲原郡西川村の産にて、今は二松学舎に在り。曾て北海に航したることあり、心に忘れざるより、余が千島の開拓に従はんとの説あり。是より先きに従行を請ふもの、野津愛輔あり。一番町二十七番地に住せり。田和祐吉あり。赤坂一ツ木町八十三番地に住せり。篠崎篤三あり。浅草区西馬越町七番地に住すといへり。更に池辺正実あり。薩人にて麹町飯田町五丁目十番地に住すといふ。渡辺全蔵は東京の貴族（註し）なりとぞ。大貫次郎も東京の貴族にして、飯田町五丁目に住したりしが、今は已に根室に向ひて発せり。小平軍治といふものあり。高等中学の生徒にして、信州伊那郡伊那邑の産なりといひ、余に碑文を讀ひて一円の酒を贈れり。川崎又次郎といふものあり。平

河町五丁目なる国光社に在りて社員たりといふ。永島富三郎あり。国会新聞の社員なりといふ。午後に城井寿章来訪せり。本郷今町一丁目二十五番地に住すといふ。余に二篇の文を托せり。昨夜より葵川信近来りて客たりしが、早旦より去りて人を訪ひ、晩に及びて帰れり。

八日。晴る。午前に鳥尾得菴を訪へり。此日始て千島開拓の意見十三條を認めたり。

九日。無事たり。

十日。谷氏（谷千城・筆者註）を訪ひ遂に秋月胤永を訪ふ。

十一日。森勘作と云ふもの来訪せり。大分県日田産にて教導園の下士官たりしが、今は既に免したるより、千島に至り尽力せんといへり。神田猿樂町四番地なる小林五助方に居住すといふ。土屋達太郎来訪せり。本郷台町廿八番地羽陽館に在りといふ。

秋月胤永来訪す。親戚遠藤某を同道せり。●妻の兄弟なるべし。

品川大臣（品川弥二郎・筆者註）に面会の事を托せり。

十二日。阿波国板野郡定方村なる長城平八といふもの来訪せり。今春も已に来訪したりといふ那賀郡なる橋村の和田登といふものと同道せり。登は南方漁民百戸計を北海に移したしとの話あり。

十四日。関熊太郎来訪せり。茨木県真壁郡下館の産にして、現に高等中学に在りて生徒たり。●宿所に在り。証人は●父にて、本所林町三丁目二十五番地なる大里宏道といへるものなりといふ。

ふ。千島に従はんと欲するの志を訴へたり。

十五日。下村禎篤来訪せり。土佐の人にて高知水産会の委員たり。今は哲学館二年生徒とあり。吉祥寺に住すといふ。幸とするものは芝区三田四十番地なる中将山地元治なりといふ。千島に志篤く水産の学を卒業したりとの話あり。

十六日。晴。

十七日。晴。下村禎篤、其友浅井勝太郎を拉して、石川県の人なり。友人岩井巳之助、柴原砂次郎が志賀県豪傑島山某を説て、千島に尽力せしめんとする由を聞く。岩井は嘗て余を導て水産会社に到らしめんたるものなり。津川西彦も来訪せり。青森県下北郡田名部村に住すといふ。秋月胤永が甥なり。午後東邦協會に至り千島の事を演説す。幹事白井新太郎に遇へり。

十八日。晴る。羽賀文左衛門来訪し、昆布を贈られたり。

十九日。晴れて暖なり。米本左右平来訪す。有楽町二丁目二番地に住す。相良正勝が女子於龍が居留地明石町十三番地なる海南女学校に在るを聞く。下村某、樋口劣夫・三浦良勝の二人を携へ至る。劣夫は姫路、良勝は愛知の産なりといふ。

廿日。晴る。斯文学に抵り、結城某に遇へり。佐藤一斎が門人なりといふ。

廿一日。晴る。胆振国有珠郡西紋別村網代町高橋栄四郎方なる渡辺幹三郎が書を得たり。三人と共に千島に赴かんがため移住の方法を問はれたるなり。移住は扨捉を可とす、他は答を要せ

ずと答へたり。又盛岡市呉服町三十六番戸禾●園なる山田元平が書を獲たり。元平は信州有明の里に生れたりといふ。余に千島に従はんと成り。事成らば更に報ずべし。千島は無人の境多く、此に至らんと成れば、紹介を求めて箱館に抵り、漸く工夫せらるべき旨を答へたり。

廿二日。意見書成る。竹村延馬に札幌南区南三條西八丁目九番地校商店に贈れり。

廿三日。森燭といふもの來訪せり。青森県弘前の産にて、魯学を修せる由なり。麴町山本町三丁目二番なる小泉方に寓すといふ。志賀重昂の紹介なり。午後、谷氏を訪ひ、有力者を合して四辺に貿易し、荒蕪を開拓するの説を陳す。谷氏、大に許諾するものに似たり。

廿四日。北海道毎日新聞社員橋本義知來訪せり。

廿五日。横浜福富町三丁目六番地なる博愛学校校長築山幸四郎といふもの來訪せり。千島移住の策を訪ふものなり。

廿六日。

廿七日。北海道毎日新聞社員上田重良來訪せり。木挽町一丁目十三番地なる穴戸方に寓すといふ。此日、諏訪二十番地なる次原源太郎といふもの訪へり。高津伸二郎の紹介に依れり。

廿八日。雨ふる。出でず。

廿九日。愛知県土族平岩兼雄來訪せり。日本橋区章屋町三番地阿部方に寓すといふ。三月に東京を發して北海に抵り僧となり、

周遊して柯太・挾捉に至り、数日前に帰京したりといふ。後に芝区三田小山町五番地原方に転寓せり。此夜柳沢信太來訪せり。三十日。勅諭期年会上野桜雲台に赴く。南正司・指原安三・莊實親・吉野春雄・篠森●人・松山伝十郎などに遇へり。松山は教育報知記者は勅諭の演説の一篇を托せり。

三十一日。下啓來訪し、水産会たらんことを勧めらる。下谷御徒町三丁目五十番に住すといふ(註2)。重野の女婿なり。笹倉新治來せり。徳島学生会幹事なりとぞ。猪波鑑一郎來訪す。嘗て中央新聞に在り。谷中初音町四十●三十九番地に住すといふ。千島に赴かんとするの志を告ぐ。同志に東京人前田精三郎ありといふ。

十一月一日。早旦に秋月胤永を新橋に送り、芳川(芳川顯正・筆者註)を訪ひ三十円を借れり。音村九平來訪せり。大和神武陵の隣村白井村の産にて、下谷徒町三丁目六十一番地に住すといふ。千島に志あるものなり。

二日。

三日。天●藏來訪せり。芝浜姿町一丁目十五番地に住すといふ。石丸榮之進來る。即ち川口なり。

四日。羽田英吉・多田弥兵衛來訪す。並に浜町二丁目十四番地飯島利八に寓すといふ。羽田は新潟県越后国北蒲原郡川村百三十七番地に住し、多田は茨木県の産なりといふ。午後諸子と會す。松原曠來訪す。長州の人にて、有楽町一丁目五番地石田方

に寓すといふ。下村楨篤をして菅原隆太郎を訪ふ。三河町三丁目十番地栗城栄吉方に訪はしむ。是は余に逢はんとて期日を問ふに答へざればなり。石井久太郎を同社に引く山梨県北都留郡嵩村の産なり。是は並に千島に志深きものなり。石川安平を訪はんとして果さず。是は餌差町十七番地に寄留せり。

五日。米本庄蔵を浜町なる森六郎方に訪ひ饗せらる。夜に入り芳川氏のために饗せらる。

六日。富士見軒に会す。南條文雄に訪ひ、美濃尾張の震災を聞けり。

七日。筑後久留米人馬場六郎来訪せり。牧和泉守が●なりといふ。奥●維の添書あり。水戸那珂湊なる峯岸善之介・加藤木筆吉兩人来訪せり。久米幹文の紹介なり。並に千島に志あるものたり。

八日。近衛歩兵第一聯隊なる植本傳吉来訪し、来年五月満期に属し、千島に赴かんとするの志を告ぐ。広島県豊田郡長谷村の産なり。大岡某来訪せり。築土前八万四十一番地に住すといふ。徳徳^{てい}県議員守野為五郎来訪せり。午後千島議会の議を斯文会に設く。林祥院厚生館に抵りて演説す。荒木重雄に遇ふ。宗十郎町なる紅木某方に住すといふ。

九日。西山菊次郎来訪せり。阿波富田浦町堀淵の産なりといふ。米本以蔵が名刺を持せり。現に久次米銀行に住せり。前田精三郎来訪せり。猪波の友にて、湯島切通し坂町五十番地に住せり。

原籍は横浜野毛町百七十五番地に在りといふ。菅原隆太郎来訪せり。兵庫県但馬二方郡東浜の産なり。野田玄碩同伴せり。広島県安芸岡山郡八幡村の産なり。堤新造といふもの、書を贈りて来りて面会を請ふ。浅草左衛門町一番地山田栄造方に寓すといふ。共に千島に志あるものなり。

十日。千島義会を□□□□□に設くることを約せり。夜雨ふる。竹村延馬の書を獲たり。

十一日。尾沢愛之助来訪す。信の諏訪郡●谷村の産にて、上野停車場外なる藤屋といへるに住せり。年は二十八なりといふ。伊藤正固・武下松二郎といふもの、書を馳せて千島開拓の資本を訪へり。京都吉田町火原イト方に寓すといふ。火の字は明ならず。

十五日。水産会、演説あり。

十六日。高村乙丸来訪せり。駒込追分町三十番地奥井方に住すといふ。

十七日。沢村菊二来訪す。永田町一丁目十九番地に住すといふ。田村清七・松村某来訪す。脇町の産なり。並に千島に志あるものなり。清水鹿之助は錦町三丁目八番地に住すといふ。二人も同宿なるべし。珠玖清左衛門来訪せり。近江愛知郡栗田村に住すといふ。

十九日。勝山寿三帰京。京橋区出雲町八番地に住すといふ。二十日より十二月十三日に至るまで一事を記せず。千島義会に

托したるがためなり。此間に越後刈羽郡大洲村中浜の飯塚晋助といふもの入会せんと請ふ。未だ三十歳に及ばず。健脚硬腕ありといふ。京都吉田町塩田重兵衛方寓の多田友喜も従はんと請へり。箱館住吉町百十八番地□□□□なる稲川猛も亦然り。札幌製麻会社なる中川久太郎あり。関正彬来書あり。其子のために謝せり。吉丸徹太郎来訪す。芝区南佐久間町二丁目信濃屋方に寓すといふ。田村匡交は京橋区千挽町一丁目十一番地に住せり。高木三治なるもの、千島に従はんと請ふ。大坂南区安堂寺橋通り三丁目百七番屋敷に住すといふ。金子六蔵来りて地学協會のため演説を請ふ。築地二丁目三十八番地に住する由なり。十三日遂に往きて演説せり。昨此日庁淵琢来訪せり。二松学舎に寓せり。

二十日。能弁会の請に應じて演説す。添間真学の話なり。本会は本郷本町六十六番地を事務所としたる由なり。沼田正宣来訪す。阪田橋岸一号に在りといふ。尾張の人なり。吉田宗次入会を請ふ。新桜田町十二番地飯田菊三郎方に寓すといふ。伊勢の人にて、水産伝習処に在りといふ。岡本柳之助は赤阪絵町六番地に在り。

二十八日。丹波篠山の平野恭蔵といふもの来訪す。北神保町十二番地加藤方に寓すといふ。義会を賛成せんとするものなり。同志に水上郡の三崎弘蔵・小谷広吉二人ありといふ。朝比奈書を贈り来る。芝区葺●町廿一番地に住すとぞ。

明治廿五年。十四日。宮崎廉来訪す。京橋区●地二丁目十六番地に住すといふ。原籍千葉県倉藩の士族なり。此間に臼杵盛衛来訪せり。本郷元町二丁目六十六番地小柳富次方に寓す。専門学校生徒にして徳島藩の人なり。毛利清雅来訪す。紀伊国西牟婁郡田辺稻成村の産にて、嘗て日報社に在りといふ。間篠俊雄は大岡が携ふる所たり。浅草千束町二丁目二百三十五番地なる学校の長なりといふ。並に千島に志あるものなり。山下喜一郎は南千住町三百六十五番地に住すといふ。千住製紙所工場掛なり。未だ其人を見ざりき。

二十一日。深川小松町なる染谷浜七といふもの、書を贈り来りて面会を請へり。水産会員にて肥料を業とする由なり。是より先に神奈川津久井郡川尻村なる一書生小林喜一來れり。千島に赴くの心なりといふ。哲学館生大●龜太郎の添書あり。筑後三潯郡大川町の産にて、大坪恵吉といふもの来る。二松学舎に在りといふ。速見の添書あり。阿波三好郡の又森信吉、土佐の武内侯吉と同じく来れり。芝桜田本郷町六番地なる相模屋●●方に寓すといふ。

廿一日。書を島根県松江市殿百十一番地なる内田実・白石市之助兩人に贈る。千島の間に答ふるなり。是より先に、大貫次郎帰京せり。千駄木林町九十三番地川島方に住すといふ。藤田雄弥なるもの、三浦勝太郎と同じく来る。花田某が脚氣を病めるを聞く。藤田は神田区三崎町二丁目一番地に在りといふ。岡本

柳之助・(使) 遠山景直来訪す。岡本は赤阪松町六番地に在りといふ。大矢乃●四郎は下谷練●町十六番地に住せり。岡千仞は芝愛宕下町三丁目一号僑居に住せり。片田義宗は飯田町五丁目廿五番地に住せり。中川克一は三番町八番地なり。

二月十二日。来訪の諸氏を査す。吉田三郎は浅草地方今戸待ち八十三番地島方に住せり。菊地英樹は青森県津軽郡岩崎村大間越の人なり。大塚静雄は赤坂新町一丁目十五番地に住せり。木下賢良の来書あり。外国借金のを告ぐ。

三月十九日。来人を聞す。西田季一郎は日高郡静内の子田玄二郎が弟なり。錦町一丁目十二番地大●ハエ方に寓すといふ。彼が社は箱館弁天町五十五番地に在りて、山下商店と呼べる由なり。安部徳太郎は小石川原町十二番地三谷方に寓せり。弘前人なり。谷口藍田は下二番町七十一番地なり。堀内由郎は中根岸町三十六番地なり。大野清太郎は有楽町二丁目唐木方に在り。関宿の人なり。澤田六蔵は深川区富吉町二十番地に住す。肥後●郡白浜村の人なり。鈴木栄太郎は永田町一丁目三十番地なり。

藤井竹一は牛込市ケ谷本町三番地に住せり。吉村徹太郎は中猿示町九番地栃木方に寓せり。大屋半一郎は神保町二番地なり。大塚周三は三国商会の使なり。遠山景福は湯島三組町八十四番地なり。葛巻常四郎は麹町区下二番町二十九番地なり。高橋幸吉は仙台町四丁目丁葉源治方に寓するものなり。高木三治は豊前国京都郡珂郡行橋町なり。竹村延馬の舍弟。

三月廿六日。竹村延馬の舍弟阪本英五郎来訪せり。札幌南四条西四丁目小西商会の支配人荒谷幸吉が松を千島に出さんとする由を聞く。小西の支店は小樽稲穂町に在り。安沢某と同じく義会を開ける由を聞く。阪本は上六番町四十五番地なる西村貢之助方に寓すといふ。大道寺繁祐・川越右太郎は牛込区納戸町卅二番地田中フジ方なり。菊池武徳は京橋区加賀町十八番地に住せり。戸津川虎雄は芝微前町八番地杉浦方に寓せり。藤田雄弥は青森新町百九番地川口栄之進方に寓すといふ。辻村忠次郎は麻布長阪町一番地田中栄太郎方に寓せり。青森の人なり。四月廿七日。来者を点検す。佃信大は芝区白金三光町一番地に住すといふ。成田正五は青森●上ノ町六十六番地成田幸吉方に寓せり。

— 註 —

(1) 實属。戸籍のある場所を指す。
(2) 文意により「ふ」字を補った。

【十二】短文・「千嶋義会規則及予算表」
徳島県立図書館・目録番号五四六
(明治二十四)

千嶋義会創立の趣意書
千島の我に於て輕棄すべからざるは人身に脛膝あるが如し。

輕しく断たば忽ち全身に禍せん。吾儕千島の長く無人の地となり、外人漁獵を^{はし}に^まする状を聞くに忍びず。彼地永住人となりて耕漁の勞に服し、霧雨を凌ぎ^は寒を冒し、祖宗神明に誓ひて大日本国の男兒たる一分を尽さんと欲し、因て義会を創め、規則を設くるに至れり。四方有志の賛成を請ふものは、力微にして航しがたきを患ふるのみならず、大に有志の注意を促さんとするに在り。皇国の域中に生まれながら、二十一島周囲數百里の版圖を度外視して、輕しく異議を容れ妄に遁辭を陳し、吾儕の義拳を賛成しかぬるものあるは吾儕の不幸に非ず。実に其人の大不幸なり。天下後世の最大不幸たるを悲めばなり。抑も千島にては漁業を主とす。漁業は年に豐歉あれど、北海人の慣例に由るに、別紙予算表の如きものあり。永住して土地に衣食し、月俸を仰がずして各自に奮勵せば、此外に鱈・カマス・諸魚・海^{うみ}丹等を收納し、陸海獸を獵し、海草を拾採するの利も極めて大なるべきなり。方今諸國震災の慘状あり。他顧に暇あらずといへど、千島の事情は全國同胞一般の上に關したる大患にて、憂國の精神に乏しく、一日も緩慢に附せば外人侵擾する等の事ありて、國計濫出し奔命に疲るを、奈ともすべからざるものあらんとす。悔とも追ふべからざるなり。況んや今日に在りて尽力するは、各人衣食の源を開きて震災等を救済すべき義務たるに於てをや。安んぞ勇往忍耐せざることを得んや。

明治廿四年十二月 日 千島義会

千島義会規則

- 第一条 本会は千島義会と称し、本局を千島に置き、支局を便宜の地に置くものとし、姑く仮事務所を東京市神田区錦町三丁目十二番地に設く。
- 第二条 本会は千島無人の域を拓開し、公益を興し国防を助くるを以て目的とす。
- 第三条 本会は第一着に男女二百人を移住せしめんがため、金五万円を募集して其用に供す。資金全額に満たずとも、務めて移住の目的を達するものとす。
- 第四条 本会会員は分ちて移住会員・賛成会員・特別賛成会員の三種とす。
- 第五条 移住会員は別に定むる所の内規を奉じ、千島に永住して実業に従事するものを謂ふ。
- 第六条 賛成会員は本会の目的を賛成し、一円以上の義金を投じたるものを謂ふ。
- 第七条 特別賛成会員は本会の目的を賛成し、五十円以上を出金したるものを謂ふ。五十円以上を出金せざるものと雖も、本会のため徳に周旋尽力して成功を助くるものは、特別賛成会員たることを得べし。
- 第八条 移住の順序は申込の先後に従ふべし。第一期に航すること能はざるものは、第二期を待たざることを得ざれども、

知人に托して私地を請ふことを得べし。

第九条 賛成会員の出金は割納といへど妨げなし。是は移住会員が漁猟に従事したる上に税金に相応ずる魚肉獣皮肥料等を謝するものとす。

第十条 特別賛成会員たらんと欲するものは、出金の額を明記し、保証金として全額の百分の五を添へ本会に申込み、残金は二月十日までに払込むべきものとす。約に違ふものは保証金を返納せず。

第十一条 本会に於て賛成会員・特別賛成会員の出金を受くるときは、会長の領収書を附し、預金局に托し、毎週一回日本新聞紙を以て広告し、諸物を整頓したるときは更に報告すべし。

第十二条 事業にて得たる収納の純益は左の方法に従ひて分配するものとす。

十分の七 移住会員

十分の二 特別賛成会員

十分の一 積立金

第十三条 五十円以上を出金せざる特別賛成会員には利益の配当をなさず。別に報酬する所あるべし。

第十四条 積立金は確実なる銀行に托し置き、後年資金償却の用に充つべきものとす。但し会長・理事に於て必要と認めたるときは、臨時支出することを得べきものとす。

第十五条 事業に損失あるときは、特別賛成会員と移住会員とに於て、均しく損害を受くべきものとす。

第十六条 本会には左の役員を置き、時に従ひて増減す。

会長 一名 理事 二名 会計 三名 書記 四名

第十七条 会長は本会一切の事務を総理す。

第十八条 理事は会長を助けて庶務を整理し、及び会計を監査す。

第十九条 会計は会長の指揮に従ひ出納の事務に任ず。

第二十条 書記は一切の書写に任ずるものとす。

第二十一条 本会には別に評議員十名を置く。其中の三名は会長及び理事に於て之を兼ねるものとす。

第二十二条 会長・理事・評議員は総会の投票に従ひて撰定す。

其任期は一年とす。

第二十三条 会計員及び書記の任免は会長・理事の協議に従べきものとす。

第二十四条 本会役員は月棒を給せず。全く漁猟の利益を分配するものとす。

第二十五条 毎月一回評議員会を開く。但し会長の必要を認むるか、若くは評議員三名以上の申出あるときは臨時評議員会を開くことを得べし。

第二十六条 毎年六月・十二月を以て総会を開く。会長に於て必要と認めたるときは臨時総会を開くことを得べし。

第二十七条 総会に列するものは移住会員と資金三百円以上を出せる特別賛成会員に限るものとす。

第二十八条 支局にては諸物を売買する等の責あり。毎月一次集会し、或は臨時に集会して、本会と応援し移住会員を千島に送致するものとす。

第二十九条 会長以下の衆議に由りて決定したる本支義会の印章は左の如し。

第三十条 特別賛成会員は如何なる理由ありとも、始業後十ヶ年間は出金の返却を請求することを得ず。

第三十一条 本会は如何なる理由ありとも、始業後五ヶ年間は資金を返却することを得ず。

第三十二条 本会には生齒を繁殖せんことを要す。良家の女子生活困難にして、年頃に及び嫁娶の礼を行ふこと能はずして、本会に托するものあるときは、労力に服すべき証書を徴して千島に移し、速に良人を得せしむべし。

第三十三条 本会には不肖を教育せんことを要す。豪商富農が子弟の放縱なるものありて、本会に托せらるるときは、生活の料に供すべき資本を徴して千島に移し、教育を加へて彼地に永住し、生活の目的を立てしむべきものとす。

第三十四条 此規則を追加し、若くは削除せんとするときは、総会の議決を経べし。

明治廿四年十二月 日

千島義会

特別賛成会員（イロハ順）

井上円了	石黒忠憲	鳥尾小彌太	奥並継
川田剛	吉野世経	谷干城	副島種臣
村田保	久米軒文	松平信正	秋月胤永
三島毅	島田重礼	重野安禪	

千島義会収出予算表

支出之部

一金五万円也 本会資本金

内訳

金貳万六千三百〇四円七拾銭

起業費

内

金七千五百〇九円七拾五銭

漁具

金九百五拾壹円貳拾五銭

猟具

金老千〇九拾六円参拾銭

家具

金参百六拾円

諸道具

金老万〇四百参拾八円

雑費

金五千九百四拾九円四拾銭

運送費

金貳万参千六百九拾貳円参拾銭

維持費

内

金六千五百貳拾円五拾銭

飲食費

金參千七百四十拾円

手当

金壹万〇九百拾円

製造費

金五百九拾八円

消耗品

金壹千円

事務費

金九百貳拾円八拾銭

臨時費

収入之部

一金七万壹千円也

本会事業収入

内訳

金貳万八千円

鮭

四千石

金貳万貳千円

鱒

四千石

金參千円

赤狐皮

壹千五百枚

金貳千五百円

黒斑毛狐皮

五百枚

金參千円

海馬皮

壹千五百枚

金貳千円

海馬肉

四万斤

金五百円

海豹皮及油

金六千円

海馬肉伍詰

四万個

金四千円

其他諸獸魚海草類収入

差引金四万七千參百〇四円七拾銭

始業年度純益金

此七分金參万參千百拾參円貳拾九銭

移住会員所得

(一人平金百六拾五円五拾六銭六厘の割)

此二分金九銭四百六拾円九拾四銭

特別賛成会員所得

(年利一割八分九厘二毛の割)

此一分金四千七百參拾円四拾七銭

積立金

次年収後出予算表

支出之部

一金貳万八千〇八円九拾銭也

内訳

金四千八百參拾八円四拾銭

營業補助費

内

金壹千二百拾六円四拾五銭

漁具修繕

金九拾円九拾五銭

獵具

金參銭六百二拾壹円

漁獵具新調

金貳万參千貳百七拾円五拾銭

維持費

内

金六千五百廿貳円五拾銭

飲食費

金參千七百四拾円

手当

金壹万〇九百拾円

製造費

金五百九拾八円

消耗品

金壹千円

事務費

金五百円

臨時費

収入之部

一金七万壹千円也

事業諸収入

次年よりは事業に熟練すべきを以て前年よりは其収入多かるべきも仮に前年に倣う

差引金四万式千八百九拾壹円拾錢 純益金

配当割合略す

備考 永住人漁獵の余暇に従事すべき業務に左の見込あり

一金九千円也 沃度肥料 壹万八千畝

〔十三〕短文・「千島諸島の現状」

東方協会会報・北海道大学附属図書館北方資料室所蔵

(明治二十四)

肝付兼行君の次に講壇に上りたるは則ち岡本監輔君なり。君は覇府国政を執るの日、夙に柯太に航し、維新の後ち久しく同島に判官となり、柯太全島を永く帝国の版図たらしむることに就き熱心なる維持論者の一人なり。交換の後ちは殆ど口に柯太の事を談ずるを絶つ。爾来十余年後の現状は僅に交換の名を留め得たる千島諸島も尚ほ太だ顧みざるの実あり。是に於て君は深く感憤する所あり。今年の春交千島に向ひ、千里独行を試む。

「千島諸島の現状」は即ち其探検(註一)の結果なり。

千島諸島の現状(岡本監輔君講)

本日は副島先生(副島種臣・筆者注)及び福本君(福本日南・筆者注)より「千島諸島の現状」を談ず可しとの事なり。此事は

日頃余の腐心焦慮する所、之を今日此に談ずるは亦余の甚だ大慶と存する所。是を以て訥弁を顧みず、此に区々を數かんと欲するなり。

近二三年来、植民説は殊に其盛をなせり。然く其盛をなしたるは畢竟年々人口の国内に蕃殖するに従ひ、唯国内にのみ之を沈滞せしむるは策の得たる者に非ず、今日に在りては宜しく国外に目を着けざる可らずと云ふ所より来りたるものなる歟。近頃は余が嘗て柯太に赴任せしの故を以て、同島の事情を問ふ人^{すくな}からず。随て口に談じ、又新聞に筆したることも^{すくな}からず。惟だ其れ今日柯太の事を談ずるは、恰も死児の^{よかい}齡を算へると一般の感なくばあらず。抑此柯太に対して旧幕の時代にも随分骨を折りたる者多し。而も今日に至りては悉く無効の労に属したり。今之を談ずる亦何にかせん。然りと雖も今に於て是等の事を記し置かば、亦た後世の爲めに一の稽考ともならんかと思ひ、同島一体の始末に就きて余の記憶せる所、又故老の今日に存する者に^{ただ}質して、昨年来四五巻の書を著したり。當時之を著すに就きて、種々往時を追懷し、追懷の余は再び柯太を見たと云ふの念となりたることもあり。然れども尚ほ熟考すれば今ま復た柯太に渡航するも亦何にかせん。寧ろ柯太と交換したる千島諸島に赴きて其現状を探討せんと思ひ立ちたり。其故如何といふに、此諸島小は則ち小なりと雖も、尚ほ殆ど柯太四分の一大に居れり。然るに今日の有様は全島一人も日

本人も住するなく、又諸島の土人の如き、交換の当時に悉く率
い來りて之を一地に集めあり。而して人の千島の事を説くを聞
けば、冱寒不毛にして人類の住居し得べき地に非ずと言ふ。乃
ち北海道庁に於て公にせし書物を見るに、亦這般の事を記しあ
り。實際カ斯くては如何にも憂ふ可きの至りなり。併しながら全
体千島は柯太に比すれば南方に位して居るに、樹木もなく清泉
もなく、人の住居に適せずと云ふが如きは、怪しむ可き次第な
りと。是に於て余れ兎に角実地を探検して其実否を究めなんと、
終に本年五月を以て彼地に赴くこととはなりたり。已にして函
館に達し嘗て千島に赴きたる者に邂逅し、同島の事を聴けば、
中々今迄書物や人言にて見聞せしが如きものならず。千島の産
物は柯太に比すれば寧ろ饒多なり。其中臘虎ラクコの如きは水産会社
が特權を有して其利を專モナにする所。其外莫大の利益あるも
の数ふるに違いとまあらず。臘オットセイ臍セイの如きは一夜に數百頭の多き
を捕獲す可し。挾カ捉の辺のみを探検せし所にても、物産の盛な
る一斑を充分観ることを得るなりと。左らば樹木の類は如何と
問へば、又之も乏しからず。用いて以て住屋の料とするに不足
なしといふ。此人は則ち往年余が柯太に赴きたる時帯行し、特
に柯太近辺の事に精通したる所の者、其言以て信を置くに足れ
ば、余の志は益益動けり。

是より進て根室に到り、更に千島の事情に通じたる人に問へ
ば、「千島の事は未だ真確に知れざるなり。今日已に知れわたり

たる島とう嶼しよの外に、尚幾箇の島とう嶼しよあるや、も未だ知る可からず。
且つ其れ等の島とう嶼しよに住民の在不在も亦た明かならず。千島諸
島は決して世間に伝ふるが如き索寞無望の地にあらず」といふ。

乃ち去て千島の一島色丹シコタン（註2）の裏に入れば、此処には土
人の住するあり。余平素より土人の言語を少しく解するあり。

土人も亦た日本の言語を知るを以て、十日計りも此に滞在し、
之を把て種々の事情を探索したり。土人も我故郷の事を尋ねら
るるより面白く考へしと見え、楽しんで種々の事を話したり。余
は及ぶ丈だは悉く之を筆記の内に収めたり。而る後更に挾エトロフ捉
（註3）に向ひ、尚進みて得撫ウルツ（註4）以北の諸島を觀んと欲
せしかども、之れより航行の艱便なれば、已むを得ず得撫ウルツ
より帰りたり。余の行や斯くかの如く其れ勿卒なりしを以て、其
探検せし地方と雖も、精密に魚類の来る所までを尋究するを得
ず。又上に陳ぶるが如く航行の便を得ざるの処もありて、一々
諸島を探検することをも得ざりしが故に、何も探検の結果を収
めざりし如しと雖も、以上跋涉して目撃したる所を以て柯太往
時の実験に比較し、更に土人の談話に照合して、余は断然千島
永住の目的を以て直に北航の船を泛ふかべて不可なかるべく、安心
して行くを得べしと云ふ考を定めたり。今ま土人に聴く所に拠
り得撫ウルツ以北の事情を陳すれば、観る可きの島十七八もあり。
就中物産の最多きはホロモシリ、之に次ぐをシマシリとす。若
し其れホロモシリを開きなば、其利は挾カ捉に譲らざる可しと考

ふるなり。余が渡島に常住する番人も余が為めにホロモシリの事を屢々談じ、激賞して置かざるより屢々之を土人にも訃質し、「日本人の言ふ所斯くの如し。汝等は之を如何」と謂ふや、虚誕を加ふ可からず。其真情果して然るや否やを問へば、「吾等知らざる事をば知れりと言はず。寔に番人の言に違はず。且吾等は昔日露領に住し、耶蘇を信じたる所の者なり。妄語せざることを神に誓ひて保す」といふ。而して此土人はシモシリ島よりクロウト島に渉れる中間諸島の事を知れるも、其他は知らずと云ふを以ても、其言に信を置くことを得べし。ホロモシリの西岸に二三の河流ありて、四五百石の船を進む可し。鮭鱒非常に多く、土人の粗拙なる小網を張りても、五百尾や千尾は之に入り、為に曳上ること能はざる程なりといふ。状況其れ斯の如し。是を以て若し大網を下しなば、其収奈何ぞや。北海の漁夫は為めに涎を垂れて想望するに至れり。島内には又湖水あり。其湖口の河川と相接する口頭には鮭鱒簇擁して入るを見る。土人は岸上より棒を以て之を撲殺すと。鮭鱒の饒多なる、實に比類を見ず。故に千島を開けば鮭鱒の利測る可らず。斯くの如く其れ饒多なるものを空しく捨て置くは、所謂天物を暴殄するものに非ずや。又鯨は到处何れも島辺にも見ざるなし。岸上より望めば海面に出没して潮を吐くの状、土人は根室の市街に煙烟の立ち上るに異ならずといふ。余が柯太に在るの日、亦嘗て鯨子を食はんと欲して来る所の鯨を見たり。其来るや幾十里の間、目の達する所一望鯨ならざる無かりしを思へば、千島の如きは最も応に然るべし。殊にホロモシリなどにては、一年中に三頭も四頭も鯨を必ず海岸に打上ぐるなり。其の大きさは十四五間、乃至三二十間のものあり。人ありて之を取る者なければ、悉く鯨の餌食となり居れり。鯨の多きこと実に驚く可し。全島到る処、今は鯨の領土なり。狐も亦多くして之を分領せり。鯨の通路は幅三四尺に渉り、坦々たる道路なり。狐の通路も亦二尺もあらんか。熊と狐と自から其道を異にせり。其他鼠兎の類も亦た又これあり。然れども全権を握れるは即ち熊なり。夫の鯨の岸上に打ち上げらるるや、数多の熊は簇りて黒みかかりて之を食ふも、鯨の大なる長日の糧たるを以て、寝ては食ひ食ひては寝して、肉の尽くるに至るまで遠く離れずといふ。次に鯨の多き事も亦非常なり。抑そも鯨の千島に多きは該地方に赴きたる者の皆言ふ所、横浜に在留せる亜米利加人などは、松を出して年々ホロモシリの東北海に出て鯨を釣り、三四日にして船に充て、直ちに上海あたりに賣らし巨利を博するといふ。但し鯨は挾捉より始めて千島の内は何処も饒多ならざるなきも、ホロモシリ辺は其の最なる処なり。故に之を鮭鱒と共に漁すれば其利も亦殊に多かる可し。其他雑魚も亦種々これあり。雲丹（註5）の類も亦多く、挾捉海岸等は到る所雲丹ならざる無く、其状恰も山谷に栗の堆積せるに同じとやいはんか。尚又海驢・赤鱒なども諸島の間到处にあり。此の赤鱒は北海

道にても極めて少なく、刀を以て之を切れば、其肉鮮紅滴らんと欲す。又臘虎は何処にも居るものに非ざるも、千島中には兎を産む処あり。海豹・海馬などは亦到る処に在らざるなし。此等は勿論捕獲し易からざるものなりと雖も、捕獲其方を得ば、追ては亦非常に利源なる可しと考ふ。而して此地方に於て捕漁を鮑することも亦決して難事に非ずとは熟練なる漁夫の保証する所なり。

樹木の事に就ては肝付君の高説の如く多くは地に臥し二三尺の高さにして横出せり。夫のホロモシリにては三尺のものを最大となす。其種類は樺・榛・五葉松の類を多しとす。幾年となく立腐れに腐れては又其上に生へ、其状恰も蒸籠を積上たるが如きの觀あり。之を探るとき薪材などは十分に足る可し。併しながら樹木の屈曲せるは、海岸の事にて島内の沢畔に入るときは、随分暢達したる樹木も尠からず。現に得撫の如きも海岸一帯の樹は横に偃塞しつれども、内部に進めば四五丈に余る良材の林立したるを見れば、シモシリとてもホロモシリとても、亦同一ならずんばあらず。且つ良し樹木は横に屈曲したりとて、それが為めに建屋の用に当らざるの理なき筈なり。夫の支那人などの家屋は、多くは曲木のみにて建築せり。余嘗て支那を旅行せしことありしが、山といふ山に樹木あるは殆ど稀なり。泰山・嵩山などを見て亦然り。殊に嵩山には一木なし。泰山と雖も単だ一二株あるのみなり。湖南湖北

の辺に入り僅かに稚松の青々たるを見て、始めて日本の山を見るが如き心地すなり。古より支那を赤鼎と言ひしは其れ斯かる所に因せしか。故に支那の山丘に樹木の乏しきことは非常なり。然るに今ま千島の山林は設令ひ屈曲偃塞の樹木にせよ、之を支那に比すれば確に勝りたるを覚ゆるなり。又肝付君の言はれし如く、海岸には無数なる漂木高く山積し、仮令之に火を放つても、其一処も燃尽くこと容易ならず。数月前の事なりき。得撫に於て之に火を放ちしに、七日を経るも尚ほ減せず、炎々として燃え居たり。是を以ても其一斑を見るに足らん。是等の材木を以て船を造り家を作り、板に製するに於ては亦曾て不自由を見ざるなり。

然らば其氣候は如何。此近海は潮流の為に深霧を起す処なりと雖も、島に住む者の話に拠れば、扞捉にても根室にても其土地開くるに従ひて、霧も亦漸々減じ、寒氣の度も亦今は昔より非常に薄らぎたりといふ。現に札幌の如きは明治元年より開けしが、其以前旧幕府の時代に開拓に着手せし時は、僅に十八戸の在住者を見しのみにして、陰雲蒙雨常に天日を蔽ひ、在住者は何れも寒氣の酷烈に耐え得ずして早く逃げ去りしと云ふ。然るに今日となりては嘗て陰雲驟々を見ず、殆ど内地に異なる所あらず。昔は蝦夷の地には米は出来ずといひ、殊に札幌の如きは末世末代五穀は出来ずとは当時の学者が口を揃へて説きし所。而して今に至りては豆麦は愚か米も亦ズンズン出来て学者

の言ひしことは皆嘘そになりたるを見る。是等より觀察し来れば、氣候も亦尽力の如何に由りて大に変化するものなり。夫の千島の深霧は畏る可きか如くなるも、其間は氣象静和にして、土人などは之を犯して往来し、魚を捕ふるに最も佳なりといふほどなり。全体此近海は寒中に至れば凍ると云ふ説もあれど、余の聞ける所に抛れば、千島は氷海に非ず。極寒の時分少しく凍ることあるも、是れ決して氷海に非ず。但だ二三月頃に至り極北より流れ来る氷塊に少しく困しむのみ。然れども亦其間は臘虎を捕ふには屈強の時節となす。土人の言に「臘虎を捕ふるの時節は冬期に在り。去るに日本人は夏期に来る。其取れざる固より当然なり」と。又千島の北方に進むに従ひ、霧は彌々薄しとの説あり。兎に角人の住居するに従ひて氣候は変ずるなり。札幌は勿論、札幌にても、色丹にても、国後にても、又根室にても、其土の住人より聞けば一人と雖も、昔と今と其氣候同一なりと云ふ者はあらず。然れば則ち人力の如何は、大に氣候の寒暖を左右す可し。学理上にては極めて迂闊の笑を免れざる可きも、人力が天地の化育を賛すると云ふことは、学理以外に存在するやも知る可からず。

今ま僅に千島の一斑を觀察し来りたる余を以て千島全体の事を談ずるを見て、諸君或は可笑しく考へ玉ふらん。然ども北辺の事には往時より少しく経験あり。談柄々長きに涉れども、諸君暫らく垂聴せよ。嗚呼、余や五十に余る天保時代の老夫なり。

回顧すれば十四五歳の時、一日不図柯太の事を聞き得たり。「路程は千里も以北にありて宏漠たる大島、住する者は土人のみ。何処にも附屬せず」と。心窃に之を喜び、乃ち以謂へらく「其土に赴き、仮令土人となりても之を経営したきものなり」と。是れより所々に就きて柯太の事情を探索せしかども、之を知る人も無く、又た書物といふものもなし。乃ち江戸に出て諸家に食客たりし中、一日御成街道にて一部の書物を見出したり。之を披けば蝦夷の土人が熊を捕へたり、馬を牽きたり、種々の風俗の異なる所などを精しく載せられたれば、柯太行の志は益々熟したり。

當時尊王攘夷の説は盛に興起し、朋友中にも予が論に与せよなど云ふ者も尠からざりき。然れども尊王攘夷家大抵は粗暴の徒にして、余は与に共にするを欲せず。一意尚ほ柯太の事に熱衷し居たり。会々林鶴梁翁の次男にして簡堂羽倉外記の養子となれる羽倉幸三郎といふを知り、又竹垣三右衛門の子に良太郎と云ふにも交を得たりしが、二氏は共に旧幕中翹々の人物なりき。是等の人々は朝暮に相会して議論する所あり。余其中に居りて絶えず柯太の事を言ふより、左らば行けとて幸三郎は金五両を余に与へたり。是れ実に文久二年の事なりき。是れより函館に赴き、平山健次郎と云ふ組頭を訪ひたり。是れ即ち故の大成教管長平山翁の事なり。此人に依りて添書を得、去て柯太に向ひしが、氣候に遮られて復た箱館に帰り、此に半年

余りを費したり。其間に旧幕の在住といふものになれり。在住とは役人の外にて、官命に由りて土地に住する者。当時此在住には一年十五兩を交附せらる。余は請て柯太在住となりしより、蝦夷在住の一倍増にて三十兩を受領せり。乃ち食客二人と共に更に函館を發して始めて柯太の地に渡航せしが、一人は索寞に耐ずして帰り去り、一人だけ留まりたり。是に於て住居をホロボタンといふの地に定めんと思ひしかども、露西亞人已に來りて此に占居するが故に、之に接しては混乱の基なりとて、シツカ河の最寄に住むことになりし。嗟乎、此時より露西亞といへば旧幕府は早くびくびくして居りしなり。故を以てホロボタンを止めてシツカ河の水源に行きたり。シツカ河も亦大河、石狩河に彷彿たり。乃ち此にて家を作る準備をなせしかども、一たび全島を見ざれば素志に背くとの感情より、更に手配して箱館の人を一人率いて巡島の旅を始めにき。然るに中々の困難なり。或は島の極北に行けば渦水旋回して船を捲込むといひ、或は途上深沼ありて渉る者皆陥没すといひて、古來北端まで行きし者無しと言ふ。去れども恐るるに足らざる旨を論じ、土人を率いて神農氏の遺製とも言ふべき円木松に乗り、糧米を載せて發せしが、円木船の事なれば中々に抄取らず。且つ覆没の患を避けて常に岸に沿ひて行く。其中雨降れば幾口となく、時には十日、時には二十日も一所に泊して船中に臥すなり。会々雨熄み雲霽れて去來船を發せんとするに、生憎風の起るあり

て又遮られ、已むを得ずして船を陸上に曳上げ、山上に登りて草根を掘り、或は筵を屋根にしたる草廬を作りて冒露を避くるなど種々の艱難を経て、四月より八月までの旅行を試みたり。其間糧食の缺乏を避けん為め、朝と晩とに各おの米飯一杯ほどを食ひ、其他は終始魚類を拾ひて生を繋ぎし次第なりき。斯くて巡回する中にも、随従し來れる土人の妄信せる本島北部の渦水説は常に直進勇往の途を沮害したりしが、オロップ人の移來せる者に會し、之に問へば「左る事更に無し。我は現に其辺を通過し來りし者なり」と答へたり。是に於て大に力を得て土人を叱咤して巡回了へ、九月出張所に歸りて、此に越年し、其冬も処々を巡りて十日二十日山宿野宿して極寒を犯せしこともありき。是等の経験に拠りて、極寒の時分と雖も左のみ畏るるに足らざることを覺りたり。尤も夏季六七月頃に火を焚きて暖を取りしことなどもありしかども、其比例に冬季の寒烈ならざるは余の保する所なり。

因みに今少し柯太の事を話す可し。其翌一年即ち慶応二年、此島の事に就き、余は幕府に訴へ出でしことあり。其年の春、日本人八名が露西亞の爲めに擒にせられしことありて、時の函館奉行小出は大に之れを憂慮し、両国の紛議を解かんが爲め、自ら奮發して柯太に入り、境界をクシュンナイの辺にて劃定せんと欲するの意見なりと聞き、在島の調役粗い健介余に議て曰く「境界をクシュンナイに定むるは千古の遺憾なり。之を止む

るに策なかる可きか」と。時に余や一介の書生、何の諒する所なきも、壮年血氣の頃なれば、即ち之に応じ、幕府の諸事を処する総て因循姑息の策を慣用す。然れば柯太の処分の如きも今直ちに其大分を投棄するの愚を学ばず、同じく因循姑息に出て、急に之を断ぜざるもの、却て得策に非ずやと陳ぶれば、新井も亦之を賛し、去らば疾く江戸に出て当路に説きて小出の議を停む可しとて、乃て一橋中納言今の慶喜公の執事黒川喜平と云ふに添書を与へ、且つ贈るに金拾両を以てせり。是に於て之を携へて函館に出でたり。出づれば則ち命ありて柯太の地図を引けとの事なり。已むを得ず毎日五稜廓に出勤し之を製せしが、此処が悪し此処が悪しと言ふ人もありて、五六十日を経て纔に之を脱稿したれば、是より江戸に出でて幹旋する所あらんとする所に、函館奉行は京都に赴き決を請ひて露西亜に使ひするとの事を耳にしたり。斯くては果てじと急行して江戸に達し、更に盛暑の候を冒し、奉行が昼夜兼行して西上するに後れじと、余も亦之と後になり前になり、遂に京都に入り添書を出して意見を陳したり。然るに當時天下の事多端を極めたる折柄、柯太事件にのみに掛り居るの暇なしとて、思ふが如く披取らず。羽倉幸三郎は為めに大に憂慮して種々周旋の労を取られ、因て小監察大監察等にも数しば会して進説せしかども、意見は終に達せずして、小出は愈いよ露西亜に使用するの状なれば、万已むを得ず小出を見て最終の抗拒を試みると欲し、之を訪へば小出

は放口して「實際の事傍觀者の議論の如くするを得ず。汝之を岡本監輔に委任すれば、柯太の事は監輔全然之に任ずるを得る証拠を出し得るやな」といひて、余が説を容れず。乃ち書を飛して此顛末を新井に報じ遣したり。新井は書を得て悲憤措く能はず。其年の冬、函館奉行に建白するとて柯太より函館に出でしが、熱病に罹り、身を五稜廓の氷中に投じて没したり。此人の如きは慷慨憂國幕臣中には多く得難き人物なり。斯る人物は朝廷にても何とか追賞の典もがなと思ふばかりなり。

抑、余は在京一ヶ月ばかり。終に志を得ずして空しく国に帰り、後ち復た京都に出でて豫て読書を授けたる好みを以て清水谷卿（清水谷公考・筆者註）の食客となる。当時卿家の貧乏と儉約とは、余をして説きに三日を連ねて食はずに居せしめたることあり。其の間にも堂上方などにも説きたれど、徒らに一場の茶話となるのみに過ぎず。時に甲州の人に渡瀬檢校と云ふ医者あり。余深く之れと交り、日夕蝦夷柯太の事を談ず。檢校、為めに幕臣等に進説の手續を与へしかど、亦終に寸効あらず。折りから函館に於て嘗て相知れる山東一郎、今は山東直砥が尋ね来り、柯太防禦の急務を思ひ、来り訪ふの意を致せり。是に於て頗る力を得て相議する所あり。山東が後藤伯（後藤象二郎・筆者註・阪本龍馬などを知るに由り、余は阪本の許を訪ひ、柯太の急務を論じたりしに、阪本曰く「君の論ずる所、誠に然り。然れども国内の事、今方に切迫せり。暫らく此の事局を了するを俟

て」と云ふ。其の他会津人士などにも之れを論じたれども、有志の士は概ね皆切迫の時事に奔走して、余と事を同するものなし。然れども余は尚ほ孤志を守りて柯太の事に熱衷せり。既にして大政一新となり、三四月頃に至れば京の二條に太政官を置かれたり。余は好機失ふ可からずと思ひ、^{しばしば}屢々太政官に出て故岩倉公等に進説し、其の時分には副島先生なども出頭せられたれば、余は又た先生並に大久保（大久保利通・筆者註）・広沢（広沢真臣・筆者註）・井上（井上馨・筆者註）の諸氏をも屢々訪ひて、柯太の処置を促せり。岩倉公は則ち曰く「余が柯太に行きて一たび実地を檢するまでは暫く待て」と。然れども余は之に服せずして、「公の柯太行を待つは百年河の清を待つと一般なり」と抗し、時に腰弁当にて太政官に上り御沙汰を得ざれば退かじとまで陳べたれば、徳大寺殿（徳大寺●●・筆者註）などは「勸慮を臆断せんとするは不敬なり。汝は汝の欲するままにせよ」とまで叱せられたり。然れども尚ほ志を廢せず、抗疏直訴以て微衷の在る所を尽す。^{たまた}会々鎮撫使を全国に派出せらるるに及びても、北海道には独り其事なし。余益ます奮激して北門の急を説く。漸くにして函館に裁判所を新設せられ、又余が寄食せし主人清水谷公業卿 函館総督に任ぜらるるに会へり。当時創業の運に属し、朝廷其人に乏しき際なりしかば、余が如きも俄に挙げられて権判事となり、井上石見は則ち判事となり、昨日までは飯を食ふことすら出来ざりし者が、今日は忽ち数百金の月

給を賜はるの身となれり。乃ち急に準備して五十人ばかりを率^{ひきいて}て函館に赴たり。已にして無事に函館を幕府より受取り居るを、暫くにして余が柯太の事を知るといふを以て、周回八百里の柯太全島を挙げて余一人に委任せられたり。余以^{おも}て謂へらくは余が畢生の力を尽す可き所なりと。やがて米五千俵、豆醬之にかなひ、併せて金四百円を領し、農工三百人ばかりを率いて之に赴き、一年間柯太を維持せしに、秋に入りて幕府の脱走兵函館に入り、井上判事は其所在を失すとの報あり。翌年に至れば来人口々に函館総督青森に逃れ、此にも今に脱走兵襲来す可しと説く。是に於て余は深く慨嘆せり。初め余の京都を發せんとするや、当路の人往々之を危ぶみ、「是れ正に賊地に赴くなり。兵を従へて行かざるを得ざる可し」といふ者あり。余は一切のを辞し尺鉄寸兵を要する所に非ずと断言し、而る後ち山東等と政府の裁可を経来りしなり。當時余の意には則ち謂ふ、万一賊此に來らば大義を宣して之を服す可し。賊にして果して開拓に志あり、強て土地を要せんか。之を与ふるも又可なり。何となれば官軍といひ賊といふも、畢竟是れ皇国の臣民なり。皇国の臣民を以て皇国の土地を保つ。其土を暴棄して人の取るに任ずるに勝れること遠きを以てなり。余が僅に五十人を率いて函館に赴きは、全く是に由るなり。然るに今ま総督は逃れ、井上石見は死生を知らずといふは、事皆最初の所期に反す。余の遺憾想ふ可きなり。後に山東一郎に会へば、一郎余と同一の

洪嘆を發したりき。

余は今更に余が^{さき}向に柯太を去り小出を逐ひて京都に出でたる以後の柯太の事情を略説す可し。小出は其後終に露西亞と柯太雜居の約を立てたり。此令の一たび發するや、露西亞は直ちにクシユンナイより南方に二箇所、他方に一箇所、都合三箇所に堅牢なる家を建築し、此に立脚の根拠を定めたり。故に余が柯太の事を委任せられて、此に再航するや頗る旧觀を失し、^{うた}軋た感慨の情に堪えざりき。然れども露人未だクシユンコタンの地にまで到らず。尚ほ頗る頼むところありき。然るに函館の戦争一たび起るに及び、露人軍艦を辺海に送り、小樽・石狩のあたりより柯太に涉りて、朝夕我を窺ふの情あり。六月中旬に至り、天色黃丹、日輪紅赤、未曾有の氣象を見る。土人は惶惑して以て露人来るの徴といふ。奇なる哉、露人突然としてクシユンコタンに上れり。露の一士官は兵卒二十人ばかりを率い、傍若無人に港のハツコンカシを取り、使を送りて告げて曰く「今ま此地を取るに就き一言之を通知す」と。余は之に対して憤慨胸を衝き、必死の覺悟を極めしが、元來余は諸君の見聞せらる如く風采なく、且つ弁舌に拙なければ、部下の伊東新八が學問あり弁才あり、兼て儀容に富めるを選びて談判委員となし、露人が我土人の墓を發き、漁場を毀つの所為は、小出条約の許さざる所、又両国國際に於ても有るまじき所、而るに今ま之を犯すは何故ぞと敵に彼を詰責せしめたるに、士官メーヨルは汗を

流し一言も之を釈く能はず。然れども彼は頑然として伊東に謂て曰く「貴下の言誠に然りと雖も、国帝の命なれば何人の言あるも、余は之を廢する能はず」と動かざれば、之を如何ともする能はず。已むを得ざれば、余は急に之を政府に上申せんと欲し、先づ土地の土人をして彼に内通せしめざる為に、悉く懇ろに説諭し、余が帰り来るまで動揺すること勿れといへば、集合したる土人落涙を催し、嘗て一人の露西亞に帰せんといふ者なし。余は今之を臆起するも為に胸塞るを覚ゆるなり。是に於て余は其翌日此を發す。土人皆來りて送り、露西亞人も亦集まり見る。荒寥慘憺いはんかたなし。只心中一片の天地神明に愧るなきもの存せしのみ。嗚呼、若し当時露西亞人の代りに脱走兵にても数千千人此に來りしならば、柯太必ずしも他国の州ならざりしならん。又函館に於ける戦を経ざりしならば、露人亦俄にクシユンコタンまでを窺はざりしならん。是を思ひ彼を懷へば、函館の一戦は実に千古の遺憾なりき。

斯^かくて余は東京に出でて之を上申すれば、忽ち免職の身となれり。是時に當り北海道に開拓使を置かれ、鍋島閑叟公之が長官として島義勇・松浦武四郎等の二三三人、此に官せり。余も亦清水谷公の推挙に由り復た採用せられて島・松浦諸氏の列に入る。副島先生の如き當時開拓の事には非常の配慮あり。今の伊藤伯なども開拓御用掛となられたれば、余は諸公に對し日に國境の事を言ひて裁決を経んことを求めたり。其事の關する所、

極めて重大なるを以て、岩倉公なども屢々議場に臨まれ、或時の如きは汗を流して（熱い時分ではありしかど）之を議論せられたり。流石は諸公、国家の大事を論ずる宜しく斯くの如くなるべしと感ぜしほどなりき。去りながら結局柯太の事を主論する者は単に余一人に落つるなり。余は日本人及び土人をば徒らに柯太に遺棄するに忍びざるより、迫りて又た岩倉公にも申請する所あり。公の如き徒らに嘆息せられ、何時も議論のみにて決定せず、已むを得ざるより、副島先生に列席を請ひ、余は終に任に堪えずとまで陳べたるに、先生は余を戒め「出京は果して何の爲めにせしや」といはれしことなどありき。此の際稍々人意を強くせしは閑叟公の一語のみ。曰く「露西亞より千人移すは容易の業に非ざるも、日本より一万人を移すは易々たるなり。之を実行するに於て何かあらん」と。此事今日に至りては亦出来べくもあらざれど、当時の勢を以てすれば、之を執行して効果を觀しや疑なし。而して是れも亦空談にして終りしなり。其中丸山作樂長となり、余も亦之に屬し、豪傑數十人、農工四百人ばかりを率いて柯太に赴き、露西亞と談判を開きしに、会々復た露人漁場を犯すあり。即ち相約し刀をば真田紐にて縛し、如何の場合にも抜かざるを期し、赤手之を防禦せんと六人其場に至れば、露人果して銃を發して之を脅かす。六人自若として毫も驚かず。露人乃ち之を擒にしたり。是に於て丸山は余を残して地方を鎮撫させ、其身は上申の爲めに帰京せり。

因て余は其年八月頃まで全島を司配し居たる中に、今まの黒田伯が開拓長官となりて来るに会へり。余は従来の始末を挙げて、斯くてはこの島の維持す可からざるを痛言せしに、長官も氣の毒に思はれしと見え、種々慰諭せられし所あり。然れども其言に「目下海内多事にして柯太のみを事とする能はず。假令露西亞如何に強盛にして此島を取るとするも、我國に於て之を回復するに何か有らん」といはれたり。此言已に其意を察するに足るものあり。余は日夜苦心して寢食を安ぜず。多少の努力往く往く徒勞に属するのみ。斯ては過分の月給を受くるも終に我任を充たすを得ず。寧ろ身は漁夫となるも同地に人を募り來りて、皇國の版圖たる実を挙げたしと考へ、同行に諮れば同行も之れを賛するより、辞表を呈して後、其冬を此に過し、翌春遂に島を去れり。當時の遺憾、実に骨髓に徹せり。是れは此れ明治四年なり。是れより北海道に出づれば、果して願意を開届けられ、尚ほ御用滞在の命あり。爾來快々為す所なく、其間日に人を集め、或は所々を巡り、柯太に志ある者を募りて、種々開拓使に申立つる所ありしが、一も亦行はれず。

是れより閑居し、『北門急務』とか『窮北日誌』などを著し、一片の微衷僅に世人の顧念を冀ふのみ。居ること三四年、間散の余、支那に遊ぶ。

客中、偶々柯太交換の事を聞けり。抑々柯太全島は咸な日本の版圖なり。島の主人は悉く土人なり。北部僅に滿州民の

る経験に見ても、決して然く畏るるに足らざるを保するなり。余は何時にても行ける。今よりにても太平洋を乗廻せば仔細無く行けると考ふ。嗚呼、如何か（に）（註6）して千島は永く留めたきものなり。今日余の述ぶる所は何れも大方に裨益するに足らざるも、唯千島は安心して行くを得る、住居するを得るのと事を保証するものなり。人為の力は能く天地の化育を賛くといふ。彼の單に寒氣の猛烈とか、濃霧の深幕とか云ふ如き学理的の証は、実験的の蹟に因り、必ずしも畏懼するに足らざるなり。抑、千島開拓の事は国家大計の關する所、余は今千島の談を終に當り、一言以て此の事の実行の途に就くやう諸君の配慮を煩はさんことを深く諸君に希望するなり。但だ開拓するに於て少々の人数が個々に行きしとて、左したる効果を見ざる可し。若し善く開くと云ふ以上は、願はくは大挙して推込み、一挙にして功を成さんこと余れ畢世の願なり。

因みに記す。岡本君が「千島開拓意見十五條」なるものあり。移住開拓の方法、殖産興業の利益を説くこと丁寧懇到なり。乃ち此篇尾に収めて参照に資す。

千島開拓意見十五條

第一

千島の開拓は有志の男女を移して永住人たらしめ、千島を主

とし内地を客とし、其地を私有して家業を営み、子孫に伝ふの覚悟あらしめんことを要す。病氣等にて出島するは妨げなしといへど、必ず宗族故人等に其業を継続せしむべし。余は明治元年に三百人を募りて柯太に移すに當り、永住の目的を立てて衆と約し、誓書を呈せしめたることありき。今日に在りては此事の最爲し易きを信ずるなり。

第二

移住者に務めて土地を衣食して寒氣を凌ぎ、健康を保つての覚悟あらしむべし。漁場等の開くるに随ひ、内地商船の輻輳するありて衣食の用に欠くことなきは勿論なれど、土地の住人に功あるは輸入諸物の及ぶ所に非ず。況や土地に衣食せしむるは生活を促すの功あるに於てをや。内地の美物を羨みて輸入を仰ぐときは、力を尽して耕漁に勞すとも、内地人の借金を償ふに過ぎず。輸出の物産も内地人のため其價を裁抑せられて皆に大業を興すを能はざるのみならず、既に着手したる業を併せて廢せんとするの恐れあり。浮躁の徒が舶來の諸物を羨み、無用の贅物を輸入して国内一般の疲弊を致せることあるが如き、深く察せずばあるべからず。

第三

移住者は團結して漁業等に従事すべきものとし、收納の利益を分配せしむべし。議員を置くといへども、月俸を給せず、均しく利益を分配せしむべし。是は開拓に於て最も緊要なるもの

とす。仔細に講究して衆の異論なきを要し、同心協力して事業に服し、各自に勉強して独立自主の身となるに競はしめたきことなり。

第四

強壯男子二十人を以て漁業に従事せんには、初年に二千五百円を要す。婦児には幾分を減ずべしといへど、用意のため此数を備へ置かれたし。百人なれば一万二千五百円なり。別に帆船一雙を備ふとすれば、更に三千円を要すべし。年に豊歉あり、物に貴賤あり。一例に帰し難しといへど、一人ごとに魚類五十石を獲べきを二十五石と算せんに、百人にては二千五百石なり。百石を五百円とすれば通計万二千五百円となりて、原価を償うに足らん。節儉勉強して北海情侈の風に染まざるときは、入費は漸く減じ、物類は漸く増し、数年の後は確乎たる業を得るに至らむ。此算は北海漁民の慣例に照したるものにて、月雇の漁夫を使役するにも疑を容れざる所なり。況や給料を仰がずして各自に奮励するものに於てをや。

第五

魚類二十五石の算は鮭・鱒の類に限るものなり。鱈・鯨・海母などは言ふまでもなく、其他の諸魚も漸く網羅して遺すものなければ、其利も極めて多かるべし。山野に獣畜を繁育せしむるなども、仔細に講究したきことなり。極めて物産を興すときは、有無を交易して大に彼此の便益を長ずるものあらん。此等

の業は土着の上に従事するに利あり。雇人などの能くすべきには非ざるなり。此等のため財本を投ずるものあるときは、純益の半を移住人に給し、半を財主に収むる等の法を設くべし。財主多きときは内地にも一会社を設くべけれど、便宜の地にて一小房を借らば足れり。妄りに広大の屋宇を造りて觀美を衒ふことを要せず。此にては金銀を出納し、物品を売買する等の事業あるべし。或は耕牧の地を分配するなどの株券を売りに財主と約し、抽籤法に従ひて利益を博せしむる法を設けしむるも可ならん。此に出勤するものは衣食の資を給するのみとし、功勞を察して利益を分つの法に従はしむべし。事業に習熟せしものに月俸を給するは当然なれど、其人を得がたきため漸く習熟するを待ちて酬銀を定むべし。学力才力あるものといへども、必ず經驗習熟せんことを要す。此法は何の会社にも必要と思はるるなり。況や千島の開拓に於てをや。

第六

開拓には幾千万人といふ数を限るべきに非ず。彼地の必ず開拓すべきを認むる已上は、一挙に多く遷して業に競はしむべし。各人相保するに於て尤も便益たらん。内地商船などの彼地に赴くもの各処にて荷物を積み、空船にて帰るものなきときは、住人も俄に富庶の基を成して移るもの日に夥しく、独立自主の功を奏すること甚だ容易なるべし。物価の平均しがたきを患へば、取引所などを設けしむるも可ならん。輸出の物産は暫く無税と

し、出産の途を広くせられたし。斯くせば国家の経費も一時に過ぎずして行届き、年々に濫費を要するが如き患もあるまじきなり。余は北海道開拓の始に當り、一挙に一万户を募り、之を十分して十大村に配し、三年を期して独立自主の民たらしめんに五百万円を費さば、官吏を祿し船舶を備ふるも充分ならざることなく、其後は一錢を費さずして全道を開拓するに至らんと主張したることありき。粗漏なりと評するものあらんかと思へども、余は今に至るまで其言の錯^{あやま}らざるを信ぜり。千島の如きも僅少の入費にて多年を経過すとせば、徒勞に属するもの多く、成功は反て遅かるべしと思はるるなり。

第七

千島の利源は未だ測る可らず。鰭・鯨・海馬・海象などの如きも、其事に慣れたるものに命じて漸く捕獲せしむべし。海狸^{ラッパ}・海狗^{オットセイ}は外人の密猟するもの年々数十艘に及び、收納の額も二百万円内外に達し、生活の基を立つるもの、英人なども山川要害を写真して一処も遺さず、常に捕獸の利を獲ながら、更に某島なる高価の薬物を採拾せんと計画するものありと聞けり。海藻と諸動物との如きも頗る多かるべし。フロトン島は周囲三里にして全面に硫黄を被りたりといふ。此等も移住の上に漸く探究して、外の窺竅を絶つやうに計画したきことなり。抑々^{そも}彼島は既に寂寞無人の境界たり。外客視察等の為には、腕力強壯に武技に練達せんことを要す。賭博の代りに銃剣・長鎗・柔

術を演じ、勝ちたる者に奇利を得せしめて、武風を奨励し、万一の用に供せしめたきことなり。余嘗て北海人と談じて此事に及び、北海の急務ならんといひしに、満座賞賛感服して一人の喙を容るるものなかりき。此法は全国に施して競賭の風を公にするも可ならんと思はるるなり。況や士卒保護の行届きがたき場所に於てをや。

第八

シモシリ島なるコリトン灣は左右に石壁の屏立するあり。高さ十数丈に及びて、其内は甚だ広く、大軍艦十数艘を碇泊せしむべく、東北第一の良港なりと聞けり。他日軍港の必用あるべし。港口に暗礁あれども数千円を投ぜば開鑿すべしといふ。有力の人物にして此に根拠せば、オボック^{オボック}獺海に漁業を営み、西伯里地方に往来交易する等の便あるべし。北海第一の富豪翁とならんも難からずと想像せらるるなり。

第九

千島各処の小島は、フロトン・ウシシリ・モシリの如き、何れも大艦の碇泊に適し、風浪を避くるに便なること、露人の経験によりて既に明に邦人も多く之を証せり。霧深きときは此に抛り、小舟もて四方に往来すべし。霧深きときは風浪なきがため、各島に往来することの便なるは、土人どもが常に経験せし所なりといふ。然れば潮流の急なりといふも深く畏るるに足らざるなり。況や霧は人の開拓するに随ひて漸く減ずるの実跡あ

るに於てをや。極北に至りては霧も漸く薄しと聞けり。

第十

千島の東南なる海岸は夏日に当り露多きを患ふれども、西北は之と相反して捕鯨等に妨害を受けること甚しからず。冬季に至れば東南も晴天多く、風波安穩なりといふ。東京・函館より直に東北し、色丹洋を過ぎて往来せんとならば、何時も可ならざることなかるべし。千島土人は霧中に網を海中に施て海狸を獵したりといふ。されども二三月の頃には氷塊の流れ至ることありと聞けば、注意して此間を避くべきが如し。

第十一

千島を沍寒不毛なりと評するは我国一般の通患たり。余をして此説を主張せしめば異議するものなく、喫驚して逡巡するに至らんこと疑ひなし。余は之に反するのみならず、寒気は人を害するものに非ず。之を防禦するも容易なるを信じて説を為すゆえ、往々に人の疑ひを致せり。慨歎に堪へざるなり。海陸軍士卒の如きも稀には沍寒の堪ふべからざる説を主張するものありと聞きぬ。斯くては大軍艦を連ね幾万人を載すとも、国境を保護する任に耐ふべしとも思はれず。報告尽忠の精神に乏しきに由りて然るに非ずや。札幌諸所の婦人など、千島に移住せんと欲するもの多し。堂々たる護国の兵士にして、婦人に如かずといはば可ならんや。

第十二

千島に薪木の多きは支那地方の及ぶ所に非ず。樅・柳・樺・楓・五葉松など多くは横に蔓延し堆積して見へたり。家屋船舶は大木の漂着するものを用ふべし。漂木は積みて数丈の高さに至れるものあり。水泉も飲料に適せり。噴火の諸山もありて硫黄の気を帯ぶるものあれど、到る処みな然るに非ざるなり。陸に馬鈴薯・野菜類を辨作し、牛豚を牧養せしことは、シムシュ土人が経験せし所なり。柯太奥地の例に拠れば黒黍を作り、馴鹿・山羊などを牧飼して利益を収むるの功あること疑ひなかるべし。

第十三

千島捕漁の盛なるは其実を知るもの多く、必しも探検を要せずといへど、一船を出して着手するの余力なきは北海漁民の情実なり。彼地を沍寒不毛なりとし、相率いて逡巡せば、外人の口実を資くるに足り、一東三文に売却するの議論を生じて、忽ち柯太の二の舞を為すに至らむ。彼地を棄つべからずとせば、国家の保護と人民の義挙とに於て已むことを得ざるところあるべし。

第十四

千島地方は北海道庁権力の及ばざる所もあるべしといへど、国民の奮進するものなきがため、永く無人の地に属したるにて、道庁も奨励の術なきに困みたるなるべし。国民たるもの勉めざるべけんや。其人あるに及び別に食糧を投じ、本道を競ふて開

拓せしむるが如きは、固より道庁の責任たるが如し。罪人を移すが如きも亦然り。某々の島を限り重罪の男女を移すなどは、開拓に於て尤も功あるべし。罪人は年限もありて官の保護に帰せざることを得ずといへど、官のため役せらるものは利少く、私のため働くものは益多きやうに法を立て、各自に生活することを得るものは、妻子をも携帯せしめて常の如くに保護せらるる等の法を設けたきことなり。

第十五

近來庶民の北海に移住するものに多く、田宅什器を売却して自ら奮進しながら、尺寸の地を得ること能はず。雇作人となりて有力者を仰ぎ、家屋を経営して安住するに至らず。或は各所に逃亡し、或は故郷に帰り、或は父兄に知らしむべからずとて音信を通ぜざるなど、本道一般の風習たり。是は來人大農説の流行せる弊にて、有力者の自省せざるに由るなるべし。今は此弊を改むるも容易ならずと思はるるなり。千嶋は未だ有力者の彼地に入る者なければ、一家生活の地を得せしめんも固より難からず。人の徙るに従ひて地を授けたらんには、庶民の奮進する者本道より多く、速に開拓の功を奏すに至らん。本道に裨益せんことはより大なるもの無かるべし。有志諸君の熟考せられたき所なり。

明治廿四年辛卯十月

岡本監輔謹識

— 註 —

- (1) 原本は「探檢」に作るが文意により改めた。以下同じ。
- (2) 「シコタン」のルビは原本による。
- (3) 「エトロップ」のルビは原本による。
- (4) 「ウルップ」のルビは原本による。
- (5) 「うに」のルビは原本による。
- (6) 「に」を文意より補った。